



ほっかいどう 生涯学習 Lifelong Learning

ホームページアドレス <http://www.hsgk.jp>

新しい自分との

出会いや発見がきっとある



生涯学習実践記録・研究論文入選者表彰



ネットワーク推進事業－旭川会場



かでの講座「若さを保つ健美操」佐藤照代氏



出前講座－鹿追町

目次

●生涯学習協会「20年度事業計画の概要」…………… 2	●生涯学習実践記録・研究論文 …………… 4～5 入選者及び審査講評
●道民カレッジからのお知らせ …………… 3	●随想④ …………… 6 ・視聴覚センターからのお知らせ ・編集後記

生涯学習協会「20年度事業計画の概要」

財団法人北海道生涯学習協会

事業名	内 容
1 生きがいづくり生涯学習促進事業 「人生を共に豊かに過ごすために」	国際化、高齢化、情報化等社会の変化に対応し、生涯にわたって生きがいのある人生を送るために、「いきることはまなぶこと」の視点から、道民の方々に学習の機会を提供する。 期 間 5月～12月 人 員 1会場100人 延べ1,000人 会 場 全道10教育局管内毎1会場 参加対象 一般道民 (聴力障害者の方々のために、手話通訳者を配置する。)
2 広報紙発行事業	会員及び生涯学習に関係する機関・団体等に、広報紙を通して情報を提供し、生涯学習の振興に寄与する。 年4回発行 1回 1,200部
3 「ほっかいどう学」かでの講座事業	「ほっかいどう学」の推進のため、かでの講座を開設し、道民への学習機会提供の拡充を図る。 なお、講座の開設にあたっては、道民のニーズや今日的な課題に焦点を当て、新たな北海道の創造を目指す講座を提供する。 ○講座回数 10回 ○講座時間 1講座2時間 ○開催期日 10月～2月 ○講 師 札幌市内を中心に講座のテーマに合った講師 ○会 場 かでの2・7
4 「『ほっかいどう学』大学放送講座」支援事業	広く道民の学習活動を支援するため、大学放送講座のテキストを作成し、新たな「ほっかいどう学」の取組である地域の学習活動への活用を図る。 ○作成部数 1,000部 ○発行時期 8月下旬
5 「ほっかいどう学」ネットワーク推進事業	道内各地で実施している「地域学」とのネットワークを図り、地域の人材育成や地域づくりのノウハウを学ぶため、「ほっかいどう学実践講座」を広域的な事業として開催し、地域における生涯学習の提供の場を増やすと共に、地域づくり、人づくりを一層推進する。さらに、北海道についてより理解を深めてもらうことをめざして「北海道の歴史」に関する講座を開催する。 ○開催期日 平成20年4月～ ○会 場 道内4会場 ○内 容 ① 基調講演 「地域学」や「地域づくり、人づくり」「北海道の歴史」に関わる講演 ② 「地域づくり」等実践交流会 (2名) 郷土史研究家の実践発表 ③ まとめ ○対 象 地域学及び地域づくりに関心のある道民
6 「道民カレッジ」ボランティア （「カレッジ・ボラ」）活動支援事業	道民カレッジの充実と推進を図るため、「道民カレッジ」ボランティアを置き、学習の成果を生かし、自己実現を目的とした自主的・自発的なボランティア活動を支援し、更なる道民カレッジ運営の活性化を目指すとともに、ボランティアを核とした地方展開を推進する。 ○人 数 事務局ボラ 20人程度 (札幌・石狩管内) 地方推進ボラ 各管内5人程度 ○活動場所 かでの2・7 9階、地方事務局 ○活動内容 ①組織活動 ②広報活動 ③講座活動 ④相談活動 等々
【特別会計事業】 7 ほっかいどう生涯学習ネットワーク カレッジ（道民カレッジ）事業	学習ニーズの多様化、高度化に対応するため、学ぶ意思のある道民のすべてを対象とし、産学官が連携して総合的な学習機会を提供するとともに自立した北海道の創造に寄与する人材を育成する。 ○運営委員会 ・委員15名 年3回 参加者 一般道民 ・運営全体 2「ほっかいどう学」出前講座 12回 ・連携講座の在り方 参加者対象 放送講座受講者と一般道民 ・「ほっかいどう学」の推進 ○道民カレッジ連携講座 講座数(前期・後期合計) 1,900講座 ○評価・活用検討部会 ・委員6名 年5回 学生目標数 30,000人 (現在21,500人) ・単位認定基準 ○普及啓発・情報提供 ・人材育成プログラムの開発 ・道民カレッジガイドブック作成 ・「ほっかいどう学」のあり方検討 ・募集ポスター、パンフレットの作成 ・カレッジ手帳の作成 ○主催講座 1 道民カレッジ「ほっかいどう学」大学放送講座 放送回数 8回 放送開始 20年10月
8 生涯学習情報資料の展示・提供事業 （まなびの広場）	生涯学習に関する図書・資料パンフレットなどを展示・提供及び道内市町村・団体の生涯学習への取組や成果等を紹介。 ○ビデオレファレンスコーナー ○道民カレッジ情報コーナー (ビデオ・LD・エルネット) (ガイドブック・パンフレット・ポスター及び連携講座関係資料) ○ふるさとコーナー ○展示コーナー (道内市町村の広報誌及び情報パンフレット) (道内市町村及び団体の生涯学習活動における実践・成果等展示)
9 教材貸出事業	学習活動に有用な視聴覚教材を官公庁、学校、社会教育関係団体等に貸し出しすることにより、生涯学習活動の振興を図る。 ○視聴覚教材貸出 (16ミリフィルム、ビデオ、DVD等取蔵教材約5,000本)
10 北海道体育指導委員協議会事業受託	北海道体育指導委員協議会の事業を受託することにより、スポーツの振興等生涯学習社会の実現に寄与する。
11 北海道教育関係公益法人協会事業受託	教育関係公益法人の健全な育成を図るための研修会を開催するなど公益法人協会の業務を処理する。

道民カレッジのみなさんへ

道民カレッジ キヤッチフレーズとロゴマーク

学ぶ意欲のある道民を対象にして、多様な学習機会を提供している道民カレッジは、現在二万人を超える道民が学習に取り組んでいます。さらに親しみやすく身近な道民カレッジにするために、キヤッチフレーズとロゴマークを募集しました。多くの作品の応募がありました。道民カレッジ運営委員会におきまして厳正に審査いたしました結果左記のように決定いたしました。選ばれた作品は今後道民カレッジに関わる事業の印刷物等に用いられることとなります。

- 一 キヤッチフレーズの部
 - ・ 応募者 十四人
 - ・ 応募点数 五十二点
- 二 ロゴマークの部
 - ・ 応募者 十七人
 - ・ 応募点数 十九点
- 三 採用作品
 - ・ キヤッチフレーズ
 - ・ 「学びから 夢が生まれる 道民カレッジ」
 - ・ ロゴマーク



愛称「マナボー」

札幌市 佐々木 麗氏 作
(北翔大学 二年)

平成二十年度事業 ネットワーク推進事業 「ほっかいどう学」実践講座

道内6圏域において、地域の人材育成や地域づくりのノウハウを学ぶため、「ほっかいどう学」実践講座として開催し、地域における生涯学習の提議の場を増やすと共に、地域づくり、人づくりを一層推進する。

さらには、「ほっかいどう学」の充実を目指し、「北海道の歴史」に焦点をあてた講座を推進する。

◆「北海道の歴史」講座
ノンフィクション作家
合田一 道講師による

歴史ロマンシリーズ全四回

○「古文書に見る北の人間学Ⅰ」
松浦武四郎と坂本龍馬

・ 日時 平成二十年七月八日(火)

午後一時半より

・ 会場 かでる2・7大会議室(四階)

・ 内容 ①講演 ②実践発表

・ 定員 二百人

○「古文書に見る北の人間学Ⅱ」
榎本武揚と島義勇

・ 日時 平成二十年七月十五日(火)

午後一時半より

・ 会場 かでる2・7大会議室(四階)

・ 内容 ①講演 ②実践発表

・ 定員 二百人

*第三回、第四回は、平成二十一年二月に開催予定です。詳しい内容については、後日お知らせします。

◆「ほっかいどう学」実践講座

「地域学」をテーマに、釧路市、北見市、帯広市を会場に開催予定です。

道民カレッジはほっかいどう学で夏休みの勉強

道民カレッジボランティアには、カレッジ事務局で活動している「本部ボランティア」の方々の他に、道内各地域で活動している「地域ボランティア」の方々もおります。

地域ボランティアの方々には、それぞれの地域の団体や機関等へ講座の連携依頼やカレッジ生の勧誘、学習相談、事務局への地域情報の提供活動を行っております。

道民カレッジでは、随時ボランティアを募集しておりますので希望される方は左記にご連絡ください。



(財)北海道生涯学習協会内
道民カレッジ事務局
札幌市中央区北二条西七丁目
かでる2・7(九階)
電話 〇一一―三三一―四一一一
(内線三六―三四三三)
FAX 〇一一―二八一―六六六四
e-mail domincollegevol@key.ocn.ne.jp

ほっかいどう学検定 実施

みなさん挑戦してみませんか!

趣旨
ほっかいどう学は、道民カレッジ等における主体的な学習によって培われた北海道の歴史や文化、自然や環境等の知識や技術を北海道づくりや地域づくりに活かす学びです。
ほっかいどう学検定は、北海道をよく知ることを北海道づくりの基本とし、北海道を理解し、北海道を愛し、北海道の創造的発展の主体となる道民を育てることを目指すものです。

- 検定日 平成20年10月26日(日)
- 開催地 札幌市、旭川市、函館市、帯広市
- 検定内容 「北海道の歴史と文化」
- 検定種類 入門検定(基礎知識)
上級検定(応用編)
- 対象者 北海道に興味・関心のある道民及び全国の人々
- 主催 ほっかいどう学検定推進機構

*事前講習会の実施
札幌市(9月14日)、旭川市(8月24日)、
函館市(8月31日)、帯広市(9月7日)

・申込先、問い合わせ先
「ほっかいどう学検定推進機構」事務局((財)北海道生涯学習協会)
〒060-0002
札幌市中央区北2条西7丁目かでる2・7ビル(9階)
電話 011-231-4111(内線36-370、36-343)
FAX 011-281-6664 Eメール college@hsgk.jp

平成十九年度
生涯学習実践記録・
研究論文入選者名簿
(平成二十年二月二十二日決定)

最優秀賞

・「みんな違ってみんないい」と
思える心を広げたい

清里町 山崎 秀樹

優秀賞

・わたしと生涯学習

札幌市 榎本 聡子

佳作

・「輝やきあつて生きるために」

札幌市 斎藤 紅香

・私たちの生涯学習とこれから

恵庭市 泉谷 清



わたしの生涯学習

「みんな違ってみんないい」と思える心を広げたい

一 私にとつての生涯学習

私のこれまでの人生において、「生涯学習」は大きな位置を占めている。家庭、学校、職業を通して日々の生活から学ぶことが多く、これからも文字通り「生涯」を通して学び続けるであろう。積極的な学習者であると同時に、誰かの「何かを学びたい」という欲求を満たせる人間でありたいと強く思っている。

私は今まで人々との関わりの中で様々な英知を授かってきた。それがなければ知ることがなかった事は数知れない。農家に生まれ育ち、家族に学んだ生活の知恵、恩師や仲間から授かった学問、教職で得た職業人としての経験、多文化社会での生活経験や日常の生活は、私の中ではすべて広い意味の「生涯学習」だと捉えている。

その中で私が出来たことは、そのような経験を、家庭や職場や地域の生涯学習に役立てることである。特に、日本の文化を世界に、そして世界の言語や文化の面白さや奥深さや多様さを多くの人に伝えたいと考えている。そうすることで世界の様々な文化に触れ、人々と心を通わせる素晴らしい機会を知り、お互いに理解し尊重しあえる気持ち、「みんな違ってみんないい」と思える心を広めたいと思う。

二 学園都市ポストンでの生活と生涯学習の形

私は現在高校で英語と海外の文化を教えている。語学とは長い付き合いで、興味のかっけは中学時代までさかのぼる。町が主催する英会話教室に通い、言葉や学ぶことが広い世界を見せてくれることを知った。

高校生の頃、北海道の姉妹校交流で米国ポストンに高校生を短期派遣する事業があり、学んだ英語を試せる機会に心踊

つたのを覚えている。ホームステイでは、

覚えたての英語が通じる喜びを知った。米国の歴史が始まったポストンで、独立戦争の意味や同州出身のケネディ大統領の偉大さを知る旅に興奮した。「旅は語学や地理歴史、政治経済を知っているからこそ楽しめる」という、教養の大切さをその時実感した。「いつかここに戻りたい」と淡い夢を胸に帰国した時は、十年後再びポストンで教師として日本語を教えることになると思っていなかった。今もその偶然と経験に感謝するばかりである。

教員四年目に北海道教育委員会と文部科学省の二年間の教員派遣プログラムで、ポストン中心部のスノーデン・インターナショナルスクールに赴任した。この学校の使命は、世界の多様な文化と言語を学び、グローバルな視野と寛容さを教えることである。私の担当は日本語とアジアンスタディであった。移民や低所得層の家庭の子も多く、英語がままならない子も多い。そこで日本語と日本語を教えることは大変なこともあったが、面白い経験であり挑戦でもあった。生徒の興味を沸くように日本人野球選手、アニメや日本車など身近な題材を工夫した。また、校長から日本の武道を使い、特別支援クラスに礼儀作法を教えて欲しいと依頼され、合気道を使い礼儀や自分を大切に作る気持ちを説いた。また、学校の「アジア文化の日」では日本文化紹介ブースを設け、日本文化をPRした。そのような活動が彼らの人生の何かに役立ってくれば嬉しく思う。

ポストンの生涯学習の仕組みで印象深いのは、NPO団体と地域社会が生涯学習に大きく寄与していることだ。市の中心部にNPO団体の社会人学習センター

があり、数多くの講座が開講されている。講座は語学、スポーツ、料理、パソコンの操作、自然観察や歴史探索など100講座以上開講されており、専門知識を持つ地元講師が教え、多くの社会人が受講している。このように、安価で誰にでも開かれた生涯学習のシステムが整っているのは非常に価値があることだと実感した。私自身も講座を受講した。「サバ

イバル英会話講座」では世界各地から来た移民の方々と出会うことができた。チャンスを夢見て渡米してきた人々との交流は良い刺激になった。「独身のための料理講座」は「独身の」が売り文句であり、ある種社会人の出会いの場であった。「合気道講座」では合気道を、「精神的鍛錬の手段」よりは、「実践で勝負手段」と考えるアメリカ人から習うという異質な経験ができた。

ポストンの生涯学習を支えるもう一つの要素は、「ノブレスオブリージュ」、つまりゆとりのある者が期待される社会的義務を意識していることだ。彼らは地域の文化的イベントへの参加や奉仕活動を期待されており、自らもよく活動する。私がボランティアとして参加した異文化交流イベントは、日本の灯笼流しや太鼓や舞踊などの伝統芸能を披露する行事で、地域から寄付金を募って設立された基金で行われている。スタッフも知日派の地域住民や日本語を学んでいる人が多かった。このようにボランティアや地域の基金が文化交流に積極的にかわり、成果を地域の人々と共有することで異文化理解の意識を高めているのは意義深く、このような取り組みが地域の生涯学習の土壌を作っているといえる。

三 学校教育からはじまる生涯学習としての異文化理解

帰国後、米国研修で得た経験を教育現場で還元したいという思いを胸に網走管内の清里高校に赴任した。生徒数一二〇

名ほどの小さな学校である。町の教育委員会にはA L T（英語指導助手）が長年常駐しており、町が毎年中学生を短期と長期でニュージージーランドの姉妹都市に派遣するという交流を十年以上続けている。子ども達は小学校から英語や海外文化に触れられる恵まれた環境におり、私の役割は生徒の英語力をさらに向上させ、異文化に触れ、それを受容できるグローバルな視点と心を養うことだ。

生徒の強みは英語に物怖じしないこと、弱点は特に語彙や文法がもつと必要なことである。長年同じA L Tに習うため文化学習が偏りがちなことも補強すべき点であった。農業が主な産業の街には大規模な人の出入り、大学や留学生などもなく、国際交流イベントの機会も少ないため、学校の授業でA L Tとの交流を増やし、語学と文化を学び、毎年町が派遣するニュージージーランド研修を活用することでそれを補えないか考えた。

そこで、英語力と異文化に触れる場を増やすために、年三十回来校して授業をしていただいている町のA L Tに加え、年に二十回ほど網走教育局のA L T二名にも来ていただくことにした。これにより、A L T三人で年間約五十回の実践的な英語授業が可能になる。また、英語検定を積極的に導入して自学自習を促し、数年前三級合格が数名だったのが、二級に三名、準二級も十五名合格し、三級の年間合格者数は二十九名に増え、本校生徒の英語力と語学や異文化に関する興味は増大した。

A L Tとの授業では天気予報や買い物、英会話など、人前で表現する活動を多く導入し、教師中心型から生徒参加型の授業に改善した。また世界各国から来たゲストによる文化紹介や、海外の学校と交流、英語レシピで調理実習を行うなど、実践的に英語を使う機会を増やした。その結果英語に興味を持つ生徒が増え、町の派遣でニュージージーランドに一年間留学

し、高い英語力と自立心を身に付けて帰国する生徒も出た。今後は多くのA L Tの協力を得て、近隣町村の中学生を対象に、「イングリッシュキャンプ（英語合宿）」を行うのが私の目標である。小さな町の生徒にも国際交流と英語を学べる最高の機会を提供する。それは生徒の中に「異文化理解と交流の楽しさ」という「種」をまくことだと考えている。将来それが大きな実を結んでほしいと願っている。

四 地域の国際交流に私が出ること

ポストンでの生涯学習の現状に触発され、地域の一員として出来ることを模索している。地域の英会話サークルに入会し、楽しい時間を過ごさせていた。昨年はA L Tに依頼し、家庭に伝わるカレーを地域の社会人や高校生とともに楽しむ会を設けた。インドとイギリスの二つの文化を持った講師を迎え、英語で料理を作ることが意外と簡単なことを知ってもらうこと、また町内の学校で文化交流に興味のある教員や町民との交流を兼ねた。広い世代の方が集まり、インドの料理を食べながら交流する会は成功裏に終わった。

また斜里岳の山開きには、管内のA L Tを招き、高校生と町民を交えた登山会を開いた。前日にはA L Tの出身地にちなんで「アイリッシュユナイ」名づけ、その国の料理を持ち寄る食事会で「前夜祭」を行い、雪解けの険しい登山の後には温泉で交流を深めた。地域の人々との交流を求めているA L Tと、英語や海外に興味があり交流する機会を求めている人々との橋渡し役が私の役割である。

五 異文化理解・文化の尊重は家庭から

前出の「ニュージージーランド出身のA L T」は去年私の妻になった。新聞にも「友好都市が紡いだ愛」の見出しで報道され、多くの人に祝っていただいた。言

ってみれば私の清里赴任と地域の文化交流が「家庭での異文化交流」に発展したということになる。さらにこれは、国際交流は妻の出身地との交流であり、教室で英語を教える時はややこちない「夫婦の共同作業」となる。公私混同するつもりは毛頭ないが、生徒も心なしか微笑んだまなざしで授業を受けてくれる。彼らにしてみれば、私の結婚生活は異文化理解教育や実践的な英語習得のサンプルかもしれない。「この異文化交流（＝家庭生活）は失敗するわけには行かない」と冗談交じりに言うのだが、この町がつけてくれた縁に対して感謝の気持ちを含めて恩返しをしたいと考えている。

国際結婚は好奇の対象になることもあるが、結局は人対人の心の結びつきであり、習慣の違いはそれまで身に付けてきたことが違うために表れたものに過ぎないと考えている。日本人同士の結婚と違う点があるとすれば、互いの文化と習慣はどちらに偏ることなく尊重すること、違いを理解するために努力すること、そして二つの文化を受け継ぐこととなる「未来の家族」に両方を伝える必要がある。

ることだ。それは私にとって一生懸命、まさに文字通りの「生涯学習」である。

六 私の生涯学習「みんな違ってみんないい」と思える心

「みんな違ってみんないい」という、作家金子みすずの詩の一節がとても気に入っている。これは異文化理解や国際交流にそのまま当てはまる言葉だ。これまで様々な場所で生きてきて思うのは、そういう気持ちで接すれば相手も同じ尊敬を持って接してくれる、ということだ。地域でも職場でも家庭でも日本でも海外でも通用する、ユニバーサルな普遍的な心がけなのだろう。人の違うところを挙げて、排除したり、攻撃したりすることは、同じことをされる可能性を秘めていることを意味する。

私の生涯学習は、世界の様々な文化や価値観とその人々と心を通わせる素晴らしさを知り、お互いに理解し尊重しあえる世界、「みんな違ってみんないい」と思える心を育てるお手伝いをするということである。

感 所 査 査



審査委員長 高倉 嗣 昌

今年度の応募数は、この5年間で2番目に少ない11編であった。

募集テーマは今年度も昨年度と同じ内容の3本である。テーマ別には必ずしも厳密に区分できないが、「わたしの生涯学習」が4、「わがまちの生涯学習」が2、「これからの生涯学習」が5となる。

性別では男性9人、女性2人である。年齢別では70代が5人、30代が3人、60代が2人、40代が1人であり、昨年度の反動か、平均年齢が大幅に上昇した。職業別では、今リタイアして職業的には無職、その中でボランティアなどの活動を行っている人も含め5人、囑託的立場の人も含め地方自治体の生涯学習担当者が3人、教員2人、自営業が1人である。地域別では札幌市の人々が5人、札幌近郊の人が2人、札幌から遠い人が4人となった。

今年度は応募数こそ少なかったが、粒ぞろいで、どれが入選してもおかしくない高レベルの作品ばかりであった。審査員の評価が分散し選定は難行したが、先に掲げた最優秀1、優秀1、佳作2の計4編を選び出した。

最優秀作品は、高校時代、道の海外派遣生に選ばれたことを契機として、国際文化交流への関心を深め、後に教員になり自から学びながら、地の利の決して良くない小さな町で、高校生はもとより地域の人々と密着し、地道に国際交流を進めていることが評価された。

優秀作品は、健康を害し、夫と死別した状態の中から、学習を通じて生きがいを取り戻し、それにより、健康をも克服し、積極的に生きて行くさまを、気負いなくいきいきと描き出していることが評価された。

なお今年度も字数を大幅に超過してしまった作品が2編あり、選外にせざるを得なかった。力作であっただけに惜しまれる。

随想④
お酒の始まり

今回の話は、東北大学名誉教授の島栄治さんという方の「日本の国菌コウジキン論」というエッセイから抜き書きしてみたものです。日本酒の誕生でしょうか。

わが国に酒というものが登場したのは、約六千年前の縄文時代とされています。土器の中にヤマブドウの種が残っていたことから、葡萄酒があったと考えられているのです。そういえば、北海道でもオホーツク文化を残した人たちもまた、千年ほど前に葡萄酒を呑んでいた証拠が残っています。

酒というものが神前に供えられるようになったのは、約二千年前の弥生時代のことらしく、水稲栽培と祭祀が結びつき、米と酒が神に献上されるようになったと考えられています。三世紀頃のあの『魏志倭人伝』にも、古代日本の人びとと酒の関わりについて記録されているそうです。

そして八世紀頃、日本各地で編纂された『風土記』には「口嚙み酒」のことがみられるといわれます。大隅の国には、一家に水と米とをもうけて、村につげめぐらせば、男女一所にあつまりて、米をかみて（嚙んで）、さかぶね

(酒舟にはきいれ(吐き入れ)、ちりぢりにかえりぬ。酒の香のいでくるとき、又あつまりて、かみてはきいれしものども、これをのむ(呑む)、...

このように「口嚙み酒」の習慣があったようです。沖縄の石垣島には今もこれが伝わっているといわれています。硬く炊いた飯とそ

の一割程度の米粉を嚙んで、唾で自然発酵させるといいます。四世紀初頭に実在したという崇神天皇の頃の歌が『日本書紀』に(七二〇年)にみえるといっています。

この神酒(みき)は わが神酒ならず 倭(やまと)なす 大物主(酒の神)の嚙みし神酒: ここにも「口嚙み酒」が記録されているのです。それがお神酒として日本最古の日本酒であろうと考えられているようです。

「播磨国風土記」にも神代に遡ってカビによって酒を醸したと思われる部分があるそうです。大神のみかれひ、ぬれてカビ生え

き、すなはち酒を醸しめて、庭酒(にわき)にたてまつりて宴しきカビが自然発酵に役立ったことが述べられています。これが日本酒の流れとなってきたのだと思われ

(財)北海道生涯学習協会
会長 宇田川 洋

視聴覚センター
からのお知らせ

視聴覚センターでは、視聴覚教材(ビデオ・DVD・十六mmフィルム)を無料で(送料別)貸出しています。

視聴覚センターのHPからも直接教材の検索・予約ができます。十九年度購入の教材の一部をご紹介します。

「夜回り先生・水谷修のメッセージ」 DVD 90分

「ネット社会の道しるべ」 DVD 25分

「食と農の未来を拓く研究開発」 DVD 68分

「人とふれあうみんなで楽しむ地域のために未来のために(総合型地域スポーツクラブ)」 DVD 38分

「ホスピタリティ」 DVD 83分

「ワンポイントのOJT1, 2, 3」 VHS各30分

「子どもを育む地域活動」 VHS 20分

「ドメスティック・バイオレンス1, 2」 VHS 30分

「雪合戦」 VHS 58分

「防ごう!メタボリック・シンドローム」 DVD 20分

「メンタルヘルスのためのストレス・コーピング入門1, 2, 3」 VHS 24分

「今、高齢者が狙われている!」 DVD 16分

「ベランダの野生の鳩」 DVD 32分

「心のキャッチボール」 VHS 23分

TEL 〇一一二二二一四一一
内線三六三三四三

FAX 〇一一二二二一六六六一
E-mail:college@hsgk.jp

事務局からお願い

・会員の皆様で住所が変わられた方は、事務局までお知らせください。

編集後記

○今年の冬は、雪が少なく助かると思っていたら、残念でした。

おてんとうさんは、ちゃんとお見通しでした。やっぱり帳尻が合うように例年通りの積雪量、いや今年の方が多いのかも知れません。

○積雪量が多い年は、豊作になるという。どっちを選ぶかというよりはやはり豊作を願わずにはいられません。昨年の言葉は「偽」でしたが

が食の安全という観点から思うに今も二年越しで続いているようです。そして、各報道で見聞きする限り日本の食に関する自給率が

限りにも低かったのかと驚愕する限りです。知らないことは恐ろしいです。今になって悔やむことし

きりです。

○さて、当生涯学習協会は今年度各方面の方々の温かいご理解とご支援により円滑に事業を推進することができました。特に、ネット

ワーク事業では、各地域のボランティアの皆さんの献身的な支えによってどの地域も成功裏に終了できました。

新年度も道民の方々に種々の学習機会を提供して参ります。

知ること、つまり「学びから、夢が生まれる。道民カレッジ」に向かつて、新年度もよろしくお願

い申し上げます。

印刷所/社会福祉法人北海道リハビリ